

## 「濃密な日々」

育成調教技術者養成研修 第30期生 黒川 祐希

ずっと夢に見た馬の世界。サラリーマンをしながら叶わぬ夢を見つづけて悶々とした日々を過ごしていた自分に別れを告げて、幸運にもBTCで研修することが叶い、新しいスタートを切ることができました。わかっていたつもりだったのですが、現実と理想のギャップは思いのほか大きく、「馬そのものを知っていなかった」と改めて感じる事が多いです。今でも知らないことばかりですが、「半年が過ぎた」と人に言われて気づくぐらい、私の中ではとても早く時間は流れています。

思い返せば研修が始まった当初は、道具の使い方がわからずに、馬房内のポロはろくに取れず、フォークやクマデ、竹箒すらまともに使えないレベルでした。手入れをしても馬に咬まれたり、蹴られたりと酷いもので、騎乗ではポロポロとよく落馬していました。あの頃のことを考えれば、「今は随分と成長したな」と思います。厩舎作業時間も短縮でき、他の作業を探せるようになり、騎乗でも早々に落ちることは無くなりました。最初の頃は教官が横で併走して注意されていた走路騎乗も、今では生徒だけでペースなどを考えながら騎乗が出来ます。この短期間で「こういったことを出来るようになるのがBTC」と、客観的に見れば驚きすら感じることでしょう。私もここに入る前はそう思っていたのですが、それはあくまでそういった目線だからだと思うようになりました。実際は失敗ばかりで研修が進み、知識が増えて知れば知るほど後から反省することが本当に多い

です。

10月に入ってから、JRA育成馬の馴致に参加させていただきましたが、何も知らない若馬にさまざまなルールを教えていく工程に、考えさせられることが多く、とても勉強になっています。普段接している乗用馬は、すでに調教されて大人しいので、「馬とはこういう物だ」と錯覚していたのだと改めて考えさせられると同時に、馬に対する接し方、対応の仕方、乗り方など考え直さなければならぬと反省しています。馬も生き物であり、感情を持っているので、様々な性格の馬がいます。そして何よりも繊細です。基本的には何も変わらないのですが、当然のように感じていても見失いがちな部分、ほんの些細なことが生き物を扱う上で大切なのだと気付かされました。

ここに来る前はあくまで競馬ファンに過ぎず、馬のことについては何も知らなかった自分が、この研修を受けたことにより、夢であった馬の世界が現実になり、好きなだけ馬のことを学べているので、本当に良かったと感じています。毎日頭を使い考え、葛藤し、失敗と反省を繰り返す。だからこそ騎乗が巧くいったときや、馬が応えてくれたときに感じる喜びはひとしおであり、日常では味わえないとても濃密で充実した日々が過ごせるのだと思っています。研修は残り半年を切ってしまいましたが、自己研鑽に励み一流のホースマンを目指して精進していこうと思っています。



# 「馬と共に…」

育成調教技術者養成研修 第30期生 望月 香里

4月から研修が始まり気付けばもう半年の月日を馬と共に過ごしている。入構当初は慣れない共同生活に苦勞し、経験のない厩舎作業、馬と触れ合うこともぎこちなかった。しかし、半年が経った今では、共同生活によって社会性やルールを理解し、厩舎作業も自ら行えるようになり、馬と接することにも余裕ができてきた。騎乗訓練についても、乗馬をやっていた人もいれば、馬に跨がったことのない、触ったことのない人もいた。スタートラインは全くバラバラだったのに、現時点では誰が経験者で誰が未経験者なのか見分けがつかないほど上達した。このBTCには知識を身につけたい、技術を磨きたいと望めば、それを解決してくれる環境がある。知識を身につけたいなら本を借りて調べることができる。技術を磨きたいなら寮にあるシミュレーターを使用し、さらに自分の騎乗に納得いかない点があれば、教官に相談すれば細かく的確なアドバイスを聞くことができる。それを自分で試行錯誤して騎乗に生かしていく。始めは研修施設内にある覆馬場、角馬場、1周800mの教育用走路を使用していたが、今では民間の育成牧場が共用する調教施設(BTC)も併用し、さらに充実した騎乗訓練を行って

いる。

私はこの半年間で何回か自分自身の壁を乗り越えてきた。しかし、その壁を乗り越えられたのは、失敗しても「お前なら出来る、乗り越えられる」と、信じ続けて叱咤してくださった教官方や励ましてくれた仲間達がいたからである。毎日、騎乗訓練は行っているが、100%の騎乗が出来たことはほとんど無いと思う。落馬、斜行といったアクシデントは研修生達のほとんどが経験している。失敗をすれば一日気分が重くなり、悔し涙を流す研修生もいる。しかし、失敗しなければ成功への道は開かれず、考え、思い悩み、自分自身で答えを見つけ出さなければ自分の身にならないと、私は思っている。これが馬乗りの楽しい所でもあり、辛い所でもある。これからの半年間、まだまだ未熟な私達に容赦なく次々と難問が出てくるであろう。しかし、一流のホースマンを目指す私達研修生は良きライバルではあるが、第一に仲間として共に歩んでいきたい。

研修生一同、残り半年間、向上心を忘れず研修に取り組んでいきたいと思っています。応援よろしくお願ひします。



# 『良き理解者になるために』

軽種馬育成調教センター 養成担当者 志村 和貞

4月に開講した研修も半年が経過しました。これからは騎乗技術のさらなる向上と同時に、若馬に対する馬の扱い、馴致、スピード調教など、より実践に近い形の研

修に突入していきます。今春、牧場に従事する彼らに必要なことは経験だと感じていますので、それを実践で活かすことのできる立派なホースマンになってもらいたい

と思っています。

この業界に従事して20年、指導する立場になって13年が経ちました。その中で、若い子の考え方の変化を強く感じてきました。私がこの業界に入った時の指導法は、「根性論」真只中でしたが、今の若い子にそのやり方は通用しません。理論に沿った形で受け手が納得するように指導していかないと、理解はしてくれないようになりました。しかし、私を感じるのは、こういった形で進めることによって、頭の中で「簡単にできる」という安易な考え方に直結してしまう恐れがあるように思えます。

頭では理解しても、実際にやってみると、できないといったことが起きているのが実情です。もちろん、すべてではありませんが、手本を示して教えた後に「できる？」と聞いてみると「できます！」と簡単に言う場面が本当に多くあります。ただ、実際にやらせてみても、ほとんどできることはありません。皆さんもこういった経験はお有りなのではないのでしょうか？本人は「積極性がある」とアピールしているのかどうかはわかりませんが、私にはあまり好印象を持つことができません。結局、それは当人の考え方などに問題があるのではないかとと思っています。

「できます。」よりも「やらせて下さい。」「やってみます。」と言われた方が、私は好印象を持つことができます。「できる」と言うてしまうと、「完璧にこなせます。」という意味に相手を受け取ってしまいがちになるので、もしできなかった時に、言った当人は苦しくなってしまう、せっかくやろうとしている彼らの積極性が薄くなってしまいがちになってしまいます。このようなやりとりの中で、「どう言えば相手により良い印象を持っていただけるのか？」といった言い方が彼らはまだ知らないように感じます。そういった経験の中で、若い子の考え方を知るために、積極的にコミュニ

ケーションを取ることが最善の方策だと感じるようになりました。

北海道日本ハムファイターズの選手達は栗山監督に対し、今年リーグ優勝した際の会見で「監督のために…」という感謝の言葉が多数出てきました。現場経験のない栗山監督は2月のキャンプから積極的に選手とのコミュニケーションをはかっていき、選手を信頼し、失敗してもチャンスを与え続けました。また、選手をファームに落とす際にも、落とす理由をしっかりと述べているので、選手がモチベーションを維持しながら次のチャンスが来るまで待つことができました。こういった細かな配慮が、選手からの信頼を得て、リーグ優勝が出来たのだと感じています。

ここに今の若い世代に対してのコミュニケーションの取り方などが隠されているように思います。上に立つものが、下が聞いてくることを待つのではなく、積極的に下の世代におりていき、手間を惜しまずに話かけることが大切だと感じています。また、その際にしっかりと理由を述べ、「なぜそうなのか？それではいけないのか？どう思っているのか？」と相手を尊重しながら会話の中で指導、助言をすると、相手も納得した状態で理解することができます。上に立つ者の根気強さが、下が育つきっかけになっていくのではないのでしょうか。

私は今の若い世代に対して、接し方を変え始めました。仕事以外にも積極的にコミュニケーションを図り、下の世代に入り込んでいけば、下の世代に自分の思いは必ず伝わると考えています。若い子は言葉ひとつで人生観が変わることがあります。その子達にとって人としての良い指導者、理解者になってあげられれば、これからの競馬業界になくてはならない人材に育っていくと思っています。「この人と一緒に仕事がしたい！」そう思われる方が多くいていただきたいと切に願っています。

